大河ドラマ脚本案

「龍の時代」環大阪湾政権編

　　　　　　　　　　　　　　　　三日木　人

大河ドラマ脚本案「龍の時代」環大阪湾政権編

■登場人物（すべて数え年）

三好長慶（三十九歳）　　　戦国初の天下人、幕府相伴衆、従四位下・修理大夫

三好義興（十九歳）　　　　長慶の嫡子、慶興、義長、義興と改名。筑前守

三好義賢（三十四歳）　　　長慶の長弟、阿波の国及び勝瑞城の実質的支配者

安宅冬康（三十三歳）　　　長慶の次弟、淡路炬ノ口城主（通称神太郎）

十河一存（二十九歳）　　　長慶の末弟、讃岐十河城主（通称又四郎）

足利義輝（二十五歳）　　　室町幕府十三代将軍

六角義賢（三十二歳）　　　近江国の守護大名（のちに承禎と号す）

細川藤孝（二十七歳）　　　義輝側近、兵部大輔（のちに幽斎と号す）

細川晴元（四十七歳）　　　幕府の元管領職（のちに心月と号す）

松永久秀（五十三歳）　　　三好長慶の腹心、弾正忠から弾正少弼に昇進

三好長逸（不明）　　　　　三好一門の長老的存在、日向守、従四位下

三好康長（不明）　　　　　三好長慶の叔父（のちに笑岩、咲岩と号す）

塚原卜伝（七十二歳）　　　鹿島新当流の始祖、当代無双の剣豪

畠山高政（三十四歳）　　　河内・紀伊国の守護大名、尾張守

公卿Ａ、Ｂ、Ｃ／その他、公卿

卜伝高弟／他、兵法者

大河ドラマ脚本③「龍の時代」環大阪湾政権編（本編40分）

■場面テーマ【三好長慶、兄弟とともに東瀬戸を扼し、環大阪湾政権を樹立す】）

■梗概（あらすじ）

　天文二十一年（一五五二）、三好長慶は足利義輝と和睦し、細川六郎晴元に代わって細川氏綱を管領職に就けたが、翌年、義輝は和議を破り、長慶に戦いを挑んだがあえなく敗退し、再び近江へと落ち延びた。以後、義輝は近江にて五年余、逼塞する。

　天文につづく弘治年間（一五五五～一五五八）は、畿内において大きな合戦もなく、三好長慶の治下、天下（五畿内）は平穏に鎮まっていた。

　この頃、長慶の勢力圏は、山城、摂津、丹波、和泉、淡路、阿波、讃岐の七カ国に、播磨、伊予の一部を合わせた広大な地域に及び、事実上、天下人の地位にあった。

　三好長慶が京畿に覇を唱えるに至ったのは、骨肉相食む戦国の世には珍しく、長慶以下、長弟の三好義賢（実休）、次弟の安宅冬康、末弟の十河一存ら兄弟が長慶の天下取りを支えたからである。このとき、三好軍の最大動員兵力は天下無双の六万余を誇った。

　摂津芥川城に三好長慶、阿波勝瑞城に三好義賢、淡路の炬ノ口城に安宅冬康、讃岐の十河城に十河一存という布陣は、対明貿易や南蛮貿易で栄える堺をはじめ、主要な港湾を管掌し、流通の大動脈である東瀬戸の海を完全支配するものであった。

　もはや長慶ぬきでは、まつりごとは進まなくなった。朝廷は三好長慶を将軍並に扱い、長慶と相談の上、弘治という年号を「永禄」に改めた。当時、改元は天皇と将軍の合意により行われるのが慣例であったが、永禄改元は将軍義輝ぬきで進められたのである。

　これに反発した義輝は軍を興し、三好軍と白川口（京都左京区）で戦ったが敵うはずもなく、三好軍は鎧袖一触で幕府軍を討ち破った。

　敗退した義輝は次なる一手を繰り出した。毛利元就、上杉謙信、織田信長、斎藤龍興らに上洛を呼びかける御内書を発し、「三好長慶を討て」と命じたのである。

　「理世安民」の大義を掲げ、天下静謐をめざす三好長慶は、堺に阿波、淡路、讃岐の兵を集結させ、三好軍の圧倒的武威を示すとともに、堺で兄弟らと善後策を鳩首凝議した。

　その結果、永禄元年（一五五八）十一月、将軍足利義輝と三好長慶の講和が成立し、これにより、義輝は二千の軍勢を引きつれ、五年四カ月ぶりに晴れて帰洛を果たした。

　再び、京畿に平和が戻った。

　永禄三年（一五六〇）正月、三好長慶は相伴衆の栄に加えて、従四位下・修理大夫に叙されて桐紋を拝領、塗輿の使用を許された。長慶の嫡男義興は正五位下・筑前守に任官され、長慶親子は正親町天皇の即位式警固祗候の栄に浴した。

　ここに、三好家は足利一門に並ぶ家格を得、三好長慶の阿波、讃岐、淡路（ＡＳＡトライアングル）を拠点として天下（京畿・堺）を支配する環大阪湾政権が名実ともに成り、阿波人にとって最も輝かしい時代が訪れたのである。

大河ドラマ脚本③「龍の時代」環大阪湾政権編（本編40分）

■場面テーマ【三好長慶、兄弟とともに東瀬戸を扼し、環大阪湾政権を樹立す】

○禁裏紫宸殿・元日節会

　　　禁裏の紫宸殿に公卿らが集まり、ひそひそと話し合っている。

　　　◎テロップ

　　　弘治四年（一五五八）正月

　　　御所・紫宸殿

ナレーション「時は弘治四年、朝廷での元日節会に多くの公卿が参集した。正親町天皇の

　御代になって既に一年が経過していたが、朝廷は資金難で即位の礼を挙行できずにいた。

　一方、三好長慶との戦いに敗れた将軍足利義輝は近江朽木谷に逃亡し、近江での逼塞は

　早五年にも及ぼうとしていた」

公卿Ａ「義輝どのが近江へ落ちて、すでに五年であるが、いったい山深い朽木谷で何をさ

　れておられるのか」

公卿Ｂ「なんでも、剣術の稽古に励まれておじゃるとか」

公卿Ｃ「その話は麿も耳にしてござる。塚原卜伝とか申す兵法者に新当流なる剣技を学ん

　でおるとのこと。天下の大将軍たる者が、木っ端を振り回して遊んでおじゃるとは、端

　武者でもあるまいし、なんとも情けなく阿保くさい。世も末と申すべきか」

公卿Ａ「それはともかく、この五年間の政治的空白はいかがなものか。義輝どのは天下の

　まつりごとを怠り、禁裏へのご奉仕も懈怠しておる。これで将軍といえようか。いっそ

　三好長慶どのを将軍並として遇し、天下のまつりごとを任せるべきではあるまいか。長

　慶どのは、朝廷への尊崇の念強く、まことに殊勝であられる。この儀、いかが」

　　　公卿Ｂ、公卿Ｃがうなずくや、その場の全員が賛同の意を顔にあらわす。

公卿Ｃ「ときに、今上の正親町天皇が皇位を継承されたとはいえ、資金難のゆえ、いまだ

　即位式を挙行できておらぬ。おいたわしくも嘆かわしいことよ」

公卿Ａ「なれど、御代が代わったのであるからして、改元せねばならぬ。その改元のこと

　や、いずれ行わねばならぬ即位式、はたまたその警固など、問題山積というに、義輝ど

　のがあれでは頼りにならぬ。ここは、やはり三好どのを将軍並、すなわち義輝どのの代

　わりとし、まつりごとを任すべきと心得る。その方針でよろしゅうござるか」

公卿Ｂ「うむ、やむを得ぬことと存ずる」

　　　公卿Ｃ以下、その場の全員うなずく。

〇近江朽木谷・岩神館（義輝仮御所）

　　　◎テロップ

　　　近江・朽木谷

　　　義輝仮御所

　　　将軍義輝、塚原卜伝の高弟を相手に激しい打ち込みをつづける。

　　　義輝、片肌脱ぎ・袴の股立ちを高く取って気合を発し、額から汗が滴り落ちる。

　　　片や襷がけの卜伝高弟、涼しい顔で義輝の木刀を受け止め、あるいは躱し、格の違

　　　いを見せつけるが、義輝は力まかせの打ち込みをやめず、見かねた卜伝が声をかけ

　　　る。

　　　◎テロップ

　　　塚原卜伝

卜伝「両者それまで。大樹、本日の打ち稽古、これまでといたしましょう」

義輝「まだじゃ。まだまだ。それに、この後、卜伝どのにも一手、ご教授賜りたい」

卜伝「ふふっ。大樹のその覇気、そのお若さ、この卜伝にはまぶしい限りにござるが、人

　の上に立つ将軍たるもの、剣技など余技にしか過ぎぬと心得られませ」

義輝「と、申されると？」

卜伝「天下の征夷大将軍は端武者とは違いまする。剣をとって戦うなど、仮にもあっては

　ならぬこと。将軍という地位、将軍家という格式は、剣を抜かずして勝つ、戦わずして

　勝つということに重きを置かねばならぬ尊きものと存じまする」

義輝「剣を抜かずして勝つ、戦わずして勝つとは、いかなることか」

卜伝「これは、それがしが廻国修行の折、琵琶湖を渡る船中で起きたことにございます」

　　　と、前置きして、卜伝は琵琶湖の渡船での出来事を回想しつつ、その船中エピソー

　　　ドを静かな声で語る。

○（回想）琵琶湖徒渡船での出来事

　　　卜伝は琵琶湖を渡る船中で若い兵法者と乗り合わせ、勝負を挑まれた。

兵法者「まことに卒爾ながら、高名な卜伝どのとお見受けする。違いますかな」

卜伝「いかにも卜伝でござる」

兵法者「ならば、一手所望。ぜひにお相手されたし。拙者、いささか腕に覚えがござる」

卜伝「これは迷惑な。それがし、無闇に試合はいたさぬ」

兵法者「臆されたか！　卜伝どの。それとも、拙者を軽んじてのことか」

　　　卜伝が相手にしないでいると、兵法者は「いざ」と剣を抜き放った。

卜伝「かような狭い船上で、剣を抜くとは慮外千万。他の客人方も迷惑でござろう」

兵法者「つべこべ言わず、尋常に勝負されよ」

卜伝「ふむ。やむを得ぬ。では、あの川中の砂洲でいかがかな」

　　　船頭がすぐそばの砂洲に船を寄せると、兵法者はすぐさま船を飛び降り、再び「い

　　　ざ」と抜き身の太刀を構える。

　　　それを見た卜伝、すかさず船頭から受け取った竿を突き、船を砂洲から離れさせた。

（回想終わり）

義輝「ふむ、なるほどのう。もしや、それが新当流極意の無手勝流であるか」

卜伝「御意。一ノ太刀の秘奥以上に大切な極意にございます」

義輝「相わかった。戦わずして勝つこと。わが心に留めておこう」

　　　そこに、元管領の細川六郎晴元が現れ、義輝の前に片膝をつき、言上する。

　　　◎テロップ

　　　細川晴元

晴元「大樹、一大事にございます」

　　　義輝、卜伝との話の腰を折られて、不興げに眉根を寄せる。

義輝「なんじゃ。いかがした？」

晴元「われらにひと言の相談もなく、帝が改元なされました」

義輝「なにっ！　改元は朝廷と幕府が話し合って決めるもの。して、余を無視して何とい

　う元号に改めたのじゃ」

晴元「永禄とかいう元号とか」

義輝「ううむ。陰でコソコソと蠢く公卿どもめ。余を虚仮にしおって」

晴元「おそらく、憎き三好長慶めが、朝廷を誑かしておるのでございましょう」

義輝「余は永禄などという元号を認めぬ。こちらも無視して、今まで通り、幕府書面は弘

　治の年号を使うがよい」

晴元「しっ、しかし、帝がお決めになった元号を使わぬと、朝廷に対する謀叛、叛逆とな

　りまする」

義輝「構うものか。どうせ虚仮にされておるのじゃ。それよりも、ただちに挙兵すべし。

　三好筑前めに、一矢報わずにおられようか」

晴元「ははッ」

ナレーション「かくして、将軍義輝は近江から出陣した。従うは、六郎晴元、六角義賢ら

　三千余の兵であったが、三好軍はこれを一万五千の大軍で迎え撃ち、北白川で両軍が激

　突した。このとき、義輝の傍らには塚原卜伝が付き従っていた。

〇京都白川口・足利義輝の陣

　　　◎テロップ

　　　京・白川口

　　　将軍・足利義輝、幔幕内の床几に座す。

　　　義輝の左右に、細川六郎晴元、六角義賢らの臣下をはじめ、塚原卜伝らが居流れる。

　　　遠く近くから敵味方の喊声が聞こえ、時折、鉄砲の一斉射撃音が響く。

　　　そこへ、斥候の兵が現れ、「お味方敗退」と注進に及ぶ。

義輝「くそっ、筑前めッ」

義賢「「かくなる上は、もはや和議しかございませぬ。和睦交渉により、時間かせぎをして

　再起を図るが上策かと存じまする」

義輝「ううむ。やむを得まい」

　　　そのとき、卜伝が末席から静かな口調で言上に及ぶ。

卜伝「大樹。今こそ無手勝流の技を、繰り出すときにございます」

義輝「おおっ、例の琵琶湖船中での技でござるな」

　　　六角義賢、怪訝な声で卜伝に問う。

義賢「琵琶湖船中での技？　卜伝どの。無手勝流とは、いかなる神妙な技でござろうか」

卜伝「無手勝流とは、剣を抜かずして勝つこと。戦わずして勝つこと。天下の権を握る大

　樹にしかできぬ技で勝つのでございます」

義賢「ほう、大樹にしかできぬ技とは？」

卜伝「しれたこと。将軍義輝公の御名により御内書を発給し、天下の諸侯に三好を討てと

　呼びかけるのでございます。反三好の勢力を諸国より糾合し、それをもって東西から挟

　撃する策をとれば、いかに三好長慶どのとて考えざるを得ますまい。しかるのち、和議

　に持ち込み、大樹のご威光によって臣下の礼を取らせる。これぞ無手勝流、戦わずして

　勝つ技にございます」

義輝「相分かった。その無手勝流、ここで使うといたそう」

ナレーション「義輝が西国の毛利元就、越後の長尾景虎こと上杉謙信、尾張の織田信長ら

　諸国の大名に御内書を出し、三好長慶を討つための上洛を呼びかけた。さらに、本願寺

　にも一揆をうながした。三好包囲網の形成である。これを察知した三好長慶のもとに、

　期を見るに敏な六角義賢が和議を申し込んできた。長慶は、堺に兄弟や重臣らを集めて、

　協議に及んだ。

〇堺の三好館（海船館）

　　　堺の三好館に、三好の主だった者が集結した。

　　　上座に三好長慶、その左右に兄弟の三好義賢、安宅冬康、十河一存に加え、長老格

　　　の三好長逸、三好康長、さらに重臣の松永久秀らが居流れる。

　　　◎各人の名前テロップ

長慶「此度、近江の六角どのが和議を申し込んで参った。さて、いかがすべきか。各々方

　の存念を聞きたい。腹蔵なく申されよ」

長逸「と申しても、これまで義輝公は度々、和議を反古にしておる。そのような御仁と和

　議を結んでも、またもや裏切られるやもしれぬぞ」

康長「そうよ。そうともよ。そもそも和議など不要のこと。今や三好軍は阿波、淡路、讃

　岐の兵も加わり、総軍二万に膨らんでおる。対する幕府軍は三千。楽に勝てる相手と何

　故に和議を結ばねばならぬ。叩きつぶせば、いいだけのことではないか」

久秀「ごもっともにございます。義輝公がわれらとの和議を破り、戦うこと、これにて三

　度。もはや堪忍できませぬ。この際、いっそのこと公方を討ち果たし、われらの手で新

　しい幕府を開きましょうぞ」

一存「おうっ、今すぐ総攻撃をかけ、義輝公の首を貰い受けるべし」

　　　一同、深くうなずく。

　　　長慶、主戦論に傾きかけた状況に声を荒立てる。

長慶「ならぬ、ならぬッ。義輝公を討てば謀叛、天下の大罪となる。謀叛人が天下を取っ

　た例があろうか。第一、朝廷が謀叛人となった三好家などお認めになるはずがない」

義賢「では、兄者は和議をお考えか」

長慶「うむ。聞くところによると、義輝公は毛利、上杉、織田らに三好討伐の御内書を送

　り、さらに武田、今川、朝倉などにも檄を飛ばしているという」

　　　長老格の長逸、腕組みをして沈思黙考。

　　　他の一同も黙り込む。

　　　このとき、淡路の安宅冬康が静かな声で意見を述べる。

冬康「いかにわれらとて、日本六十余州を敵に回すわけにはいかぬ。ここは、いったん和

　議を結んではいかがかと存ずる」

　　　長老の長逸、無念そうな表情で同意する。

長逸「よかろう。義輝公を傀儡とし、われらの手でまつりごとを行えばよい。和議じゃ、

　和議じゃ。名を捨てて実を取ろうぞ」

　　　一同、長逸の言葉に不承不承の体でうなずく。

〇京・都大路

　　　◎テロップ

　　　永禄元年（一五五八）十二月

　　　洛中

　　　和議の成立により、将軍義輝は二千の軍勢を伴って帰洛した。

　　　白馬に騎乗し、緋縅しの鎧をまとう義輝の姿が、冬の陽に輝き、群衆がさざめく。

　　　義輝の隣には、側近細川藤孝が馬首を並べ、語らいながら都大路を練り歩く。

ナレーション「三好長慶と将軍義輝は、六角義賢の仲介により和議を結んだ。これにより、

　義輝は五年四カ月ぶりに念願の帰洛を果たし、再び天下は鎮まった。永禄元年十二月三

　日のことである。

義輝「やれやれ、やっと京の都に戻れたわ。なれど、まずは荒れ果てた二条の御所を再建

　せねばならぬ。わが指揮のもと、いずれ正親町天皇の即位の礼も挙行せねばならぬであ

　ろう。何かと骨の折れることよ」

藤孝「御意。まずは本覚寺を仮御所として、二条の御所の再建を急ぎまする。次に、帝の

　即位式にかかる費用は莫大ゆえ、幕府でも用立てることが難しゅうございます。つきま

　しては、諸国の大名にその費用を拠出させてはいかがかと」

義輝「いずれの大名が応じるであろうか」

藤孝「さて。まずは諸侯に書状にてあたりをつけてみることが肝要かと……中でも有望な

　大名は毛利元就どの。近年、安芸、周防、備後、長門といった国々を手中に収め、飛ぶ

　鳥を落とす勢いと聞いておりまする」

義輝「毛利とな。うむ、任せる。早々に取りかかるべし」

藤孝「ははッ」

ナレーション「翌永禄二年、将軍義輝の還京を言祝ぐため、尾張の織田信長、美濃の斎藤

　義龍らが上洛し、二条御所で義輝と対面した。さらに越後の長尾景虎こと上杉謙信が雪

　解けの春を待って四月二十七日に上洛し、義輝に拝謁した」

〇京・二条御所

　　　◎テロップ

　　　永禄二年（一五五九）春

　　　二条御所

　　　新しく造営が進む二条御所。その大広間の上段の間に、将軍義輝が座す。

　　　下段の間には、細川藤孝らの側近が居並び、その下座に長尾景虎が平伏する。

　　　◎テロップ

　　　長尾景虎（のちの上杉謙信）

義輝「景虎、此度の上洛、大儀」

　　　景虎、義輝から声をかけられ、さらに身を低くする。

景虎「ははッ。かたじけなきお言葉。公方さまにはご機嫌麗しく祝着至極に存じ奉ります」

義輝「それが、いろいろあってのう。ご機嫌麗しいどころか、頭の痛いことがあれこれ山

　積しておる。その最たるものが、帝たる正親町天皇の即位式の費用よ。そなた、なんと

　かならぬか」

景虎「して、いかほどの費用が入り用でございましょうか」

　　　義輝、大儀そうに脇息にもたれ、溜息をついて言う。

義輝「ざっと二千貫文ほどはかかろう。それでも足りぬやもしれぬ」

景虎「それは……なかなかの大金にございますな」

　　　景虎、眉根を寄せ、腕組みをして沈思する。

　　　その様子を見て、義輝が妥協案を出す。

義輝「ならば、内裏の修繕費だけでも出してくれぬか。尾張の織田上総介にも頼んでおる

　のじゃが、まだ色よい返事が来ておらぬ」

　　　景虎、平伏し、応諾する。

景虎「畏まりました。この景虎、謹んでお引き受けいたします」

義輝「ときに、いつまで京の都におるつもりじゃ？」

景虎「京に平穏をもたらし、帝のご宸襟を安んじ奉るまでは滞在するつもりでおります」

義輝「頼もしいことよ。この機会に、いっそ、そちの手で三好を討てぬか」

景虎「それは……大樹の命とあらば、この景虎、いつでも仰せに従いますが、残念ながら、

　いまだ天の時、地の利、人の和を得ておりませぬ」

義輝「時期尚早と申すか」

景虎「御意。現下、三好どのは、正親町天皇のご信任篤く、しかも幕府の侍所に任じられ

　ております。となれば、おそらく朝廷から、畏れ多くも即位の式典警固の大役を仰せつ

　けられるものと存じ奉ります。となると、今の段階では、そのような立場の者を、大義

　名分なく無闇に討つわけには参らぬものと心得まする」

義輝「ふむ。なるほどの」

　　　義輝、唇を歪め、鼻白む。

〇三好長慶の居城・芥川山城

　　　◎テロップ

　　　摂津・芥川山城

　　　芥川山城の書院の間にて、長慶とその腹心である松永久秀の二人が、京の都の状況

　　　について語り合う。

ナレーション「正親町天皇は二年前に即位したものの、いまだ幕府の財政難のため、即位

　の式典を挙行できずにいたが、毛利元就がその費用二千貫文を朝廷に献上した。ここに、

　ついに即位式挙行の目途がついたのである。その頃、京の都では織田信長、斎藤義龍、

　長尾景虎らの軍であふれていた。この不穏な情勢に対して、三好長慶は、いかに対応す

　べきか、腹心の松永久秀と協議した」

長慶「京には尾張、美濃、越後などからの兵が入っておると聞く。いかほどの軍勢か」

久秀「織田どの五百余、斎藤どの三千余、長尾どの五千余で、ざっと一万というところで

　ございます」

長慶「ふむ。左様か」

久秀「おそらく義輝公が御内書にて上洛をうながしたのでありましょうが、このうち織田

　どの、斎藤どのはご機嫌伺い程度の兵数で問題ございませぬ。問題は五千の兵を率いる

　長尾景虎どのかと……もし、京に長くとどまり、帝の即位式警固をつとめるなどと申せ

　ば、厄介千万。我らの邪魔となり申す」

長慶「即位の礼は、幕府侍所たる我らの手でつつがなく執り行い、三好党の威勢を天下に

　示さねばならぬ。なれど、御内書に応じて上洛した者を、義輝公の手前、邪魔だと申し

　て追い払うわけにもいくまい。京の都で争乱を起こすわけにもいかぬ」

久秀「ならば、即位の式典を引き伸ばしましょうぞ。長尾どのは、武田信玄という強敵を

　抱え、いつまでも京に滞在するわけにもいきますまい」

長慶「なるほどの。して、いかに引き延ばす？」

　　　久秀、長慶に秘策を耳打ちする。

　　　長慶、深くうなずく。

〇河内・高屋城の全景

　　　◎テロップ

　　　河内・高屋城

　　　鉄砲の轟音、陣鼓、陣貝が鳴り響き、敵味方の喊声がこだまする。

　　　三好二万の軍勢が高屋城を攻囲し、総がかりで攻め立てている。

　　　軍勢の背に三階菱に釘抜き紋の旗指物が揺れ、攻撃の激しさを表す。

ナレーション「永禄二年五月、三好長慶は正親町天皇の即位式の不足分を献上するととも

　に、朝廷に対して即位の式典延期を願い出て、朝議によりこれが認められた。延期の名

　目は、河内の叛乱鎮撫である。この頃、河内では守護代の安見直政が根来寺の衆徒と結

　託して謀叛を起こし、河内守護の畠山高政を高屋城から追い出していた。同月二十三日、

　畠山高政に援軍を乞われた三好長慶は、芥川山城から出陣し、安見直政の籠る高屋城を

　攻め立てた」

〇畠山・三好軍本陣（夜）

　　　篝火が煌々と焚かれる高屋城攻めの陣中。

　　　その本陣幔幕内で、上座の床几に三好長慶と河内守護の畠山高政、下座には松永久

　　　秀ら重臣が居並ぶ。

　　　◎テロップ

　　　永禄二年（一五五九）八月一日

　　　河内・高屋城

ナレーション「三好長慶が河内守護の畠山高政とともに、謀叛人の安見直政が立て籠る高

　屋城を二万余の大軍で攻めること、すでに二カ月。戦局は圧倒的兵数の三好軍に傾いて

　いた」

　　　◎テロップ

　　　畠山高政

高政「謀叛者の直政め。主君たるわしを城から追い出すとは、まさに外道の所行。許せぬ

　ッ。それにしても、三好どのの此度の援軍、かたじけない」

長慶「なんの。河内隣国の和泉は、わが領分。河内鎮撫は、その和泉の国を守るためでも

　ござる。ともに謀叛者の直政を討ち、河内の国に平安をもたらしましょうぞ」

　　　そのとき、物見の兵が駆け寄り、長慶に注進に及ぶ。

物見「高屋城の兵、城を続々と抜け出しておりまする」

長慶「我らの攻撃に怯え、ついに逃げ出しおったか。して、いずこの方角に」

物見「大和川を越え、丑寅方面に逃げてござる」

　　　それを聞いた高政、床几から立ち上がり、長慶に言う。

高政「三好どの。丑寅の方角には飯盛山城がござる。あやつ直政は、おのれの居城飯盛山

　城に向かって逃げておるのじゃ」

　　　長慶、松永久秀に向き直り、下知を下す。

長慶「すぐさま追い討ちをかけよ。この機会に、飯盛山城も攻め落とすのじゃ」

久秀「はッ」

ナレーション「河内の高屋城を落とした三好長慶は、畠山高政を守護として復帰させ、高

　屋城に入城させた。次の目標は、安見直政が逃げ込んだ飯盛山城の攻略であった」

○飯盛山城全景

　　　◎テロップ

　　　飯盛山城

　　　飯盛山城に攻め上がる三好軍。

　　　かかり太鼓が鳴り響き、喊声が湧き起こる。

ナレーション「飯盛山城は標高三一六メートルの山頂にある。この要害の飯盛山城に立て

　籠った安見直政を、長慶が大軍を率いて果敢に攻め立てるや、またしても直政は城から

　逃亡し、大和の国に身を潜めた」

〇飯盛山城本丸

　　　三好長慶、落城したばかりの飯盛山城を視察する。

　　　その隣には、鎧兜に身を固めた松永久秀の姿。

　　　そこかしこに甲冑姿の武者や雑兵ら敵兵の遺骸が横たわる。

久秀「まずは勝ち戦にて、祝着に存じまする」

長慶「うむ」

久秀「皆の者、勝鬨じゃ。勝鬨をあげよ。エイエイオーッ！」

　　　勝鬨の嵐、三度、湧き起こる。

長慶「ときに、われらが河内で転戦しておる間に、京の都から尾張の織田、美濃の斎藤は無論、越後の長尾どのも国許に帰られたとか」

久秀「左様にございます。それぞれ隣国に敵を抱えておりますれば、京に長居はできませ

　ぬ。となれば、帝の即位式警固はわれらに任す以外になく、天下の副将軍たるお屋形さ

　ま主導の即位式と相なりましょう。まさに狙い通りの結果となり、めでたいことにござ

　います」

長慶「うむ。我ら三好家の晴れの舞台とせねばなるまい」

久秀「しかも、禁裏に参内し、昇殿ご奉仕と相なれば、その前に、幕府も朝廷もお屋形さ

　まの官位を、さらに高いものにせざるを得ません。帝の即位式を真近に控えた今、まも

　なく警固祗候にふさわしい叙位任官のお沙汰がございましょう」

ナレーション「久秀の見通しは的中した。年改まった永禄三年正月、長慶らの叙位任官が

　立て続けに行われた。長慶は管領代ともいうべき相伴衆に昇進し、従四位下・修理大夫

　に叙されて桐紋を拝領、塗輿の使用を許された。また、嫡男の義興は正五位下筑前守に

　任官した」

〇禁裏紫宸殿

　　　◎テロップ

　　　永禄三年（一五六〇）正月二十七日

　　　御所・天皇即位式

　　　永禄三年正月二十七日、禁裏紫宸殿にて正親町天皇の即位式が挙行された。

　　　その即位の礼警固に、三万余の兵を禁裏周辺に配し、三好長慶・義興父子が衣冠束

　　　帯姿で、御所の北御門から正親町天皇即位の礼が執り行われる紫宸殿に参内する。

　　　三好長慶は四位以上であるから黒、義興は五位であるから緋の衣冠束帯姿。

ナレーション「正親町天皇即位の礼が、永禄三年正月二十七日、ついに執り行われた。こ

　の日、三好長慶・義興父子は、即位式警固のため北御門から御所に参内した」

義興「御所に参内するのは初めてでございますが、なんと素晴らしいことでございましょ

　う。この紫宸殿の厳かさに触れ、感無量にございます」

長慶「うむ。白砂の前庭も神々しいことよ」

義興「御父上、紫宸殿の左右に植えられている樹木は？」

長慶「左に見えるのが右近の橘、右に見えるのが左近の桜と聞いておる。橘と桜で対を成

　してるのであろう」

義興「おおっ、帝が高御座におわされました」

　　　黄櫨染御袍姿の正親町天皇が、高御座で杓を把って南面す。

　　　命婦が御帳をかかげ、香を焚き、即位式一連の儀式が進む。

　　　日華門から入場切手（即位式観覧券）を持って入場してきた雑人（庶民）がざわめ

　　　く。この当時は、庶民にも天皇即位式の拝観が許され、紫宸殿庭上には多くの庶民

　　　が群れをなした。

　　　長慶父子、伊勢貞孝の子貞良とともに、天皇の御前の香台のきわまで罷り出て警固

　　　祗候の栄に浴す。

ナレーション「帝の即位の礼の警固祗候の栄に浴し、三好長慶とその政権は、朝廷からも

　認められることになった。ここに、三好家は足利一門に並ぶ家格を得、三好長慶の阿波、

　讃岐、淡路を拠点として天下を支配する環大阪湾政権ともいうべき「三好政権」が名実

　ともに成ったのである。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　一日放映分（40分）了

※大河ドラマ脚本➃「龍の時代」洲本会議編につづく。